「日本文学」の編成と抵抗－『琉大文学』における国民文学論

我部　聖

要旨

1950 年に開戦された朝鮮戦争のさなかに、サンフランシスコ講和会議が開かれた。会議の前後に竹内好らを中心に「国民文学論」が提唱され、広く議論された。この戦後の「国民文学論」を、戦前の「国文学」との差異を打ち出そうとする新たな「日本文学」の編成ととらえるとともに、戦後における文化統合の象徴としての「国民」が欲望される兆候とみることもできる。「国民文学」をめぐる論議のなかで、在日朝鮮人の作家金達寿の『玄界灘』を「国民文学」に回収しようとする動きがあったが、それは歴史的文脈を捨象して「被圧迫民族」に同一化しようとする、中心による周縁の包摂といえる。この中心による周縁の包摂を、「周縁」の側からとらえなおすのが本稿の目的である。

同時期の沖縄では、琉球大学の学生が発刊した『琉大文学』において「国民文学論」が議論されていた。アメリカ占領下の沖縄では、「琉球文化」を奨励する文化政策と検閲が行われていたが、同人は、「国民文学論」をめぐる言説を「流用」（appropriation）しながら、検閲の視線をくぐり抜けて、脱植民地化の言説を紡ぎ出したのである。

キーワード：国民文学論, 沖縄文学, 占領, 歴史認識, 戦争

１．国民文学への回収と抗い

1952 年のサンフランシスコ講和条約の発効によって、日本は「独立」を果たしたとされる。しかしこの「独立」の背景には、政治・社会・文化をめぐる糸／意図が絡まりあっていた。日本がアメリカ占領からの「独立」を果たしたとみなされる講和条約発効と同時に、沖縄は日本本土から切り離されて、アメリカの施政権下に入り、また在日朝鮮人をはじめとする旧植民地出身者は、強制的に「日本国籍」を剥奪されたのである。こうした複雑に絡まり合う縫い目に分け入りながら、解きほぐしていくのが本稿の目的である。

具体的には、1950 年代に竹内好によって提唱された「国民文学論」に基づく新たな「日本文学」の編成に注目し、「文学史」が構築される際に起きた「マイノリティ文学」の回収とそれに抗う動きに焦点を当てていく。

戦後日本で「国民文学論」が提起されたのは、1945 年の沖縄戦、1948 年の済州島四・

三事件、1949 年の中華人民共和国の成立を経て、1950 年に開戦した朝鮮戦争のさなかに開かれたサンフランシスコ講和会議前後の 1950 年代初頭である。これは、冷戦構造を決定づける、アジアにおける境界線／分断線が引かれていく時期とも重なる。後に、日米二国間による講和条約によって、日本と沖縄における軍事基地が強化されていく時期において、雑誌『文学』1951 年 9 月号では、「日本文学における民族の問題」が特集され、竹内好「近代主義と民族の問題」、丸山静「民族文学への道」、西郷信綱「文学における民族」などが掲載された。

竹内は、「民族を思考の通路に含まぬ、あるいは排除する」ような「近代主義」を批判しつつ、「血ぬられた民族主義」の記憶と対峙することによって、「戦争責任の自覚の不足」を克服できるとみなした。また「民族の伝統に根ざさない革命というのはありえない」として「階級とともに民族をふくんだ全人間性の完全な実現」を目指す「国民文学」を主張した [1)]。

その後『文学』は、「文学遺産をどうあつかうか」（1951 年 11 月号）や「文学伝統の断続と連続」（1952 年 3 月号）という特集を組み、また『文学』以外にも『人民文学』『群像』『文学界』『改造』などで「国民文学論」は、活発に議論されていった。しかし、「国民文学」に関する意見が一致することは難しく、本多秋五が「『国民文学』をめぐる論議」（『物語戦後文学史』）で整理したように、「国民文学論」に積極的な『人民文学』と消極的な『新日本文学』という対立も浮き彫りとなる [2)]。本多も引用した菊地章一の整理に従えば、「国民文学論」には「民族独立」や「解放」に力点を置く「国民解放のための文学」という主張と過去の遺産を含めて文学を国民に普及させることに力点を置く「文学の国民的解放」を目指す主張があったのである [3)]。

こうした論調に対して竹内は「国民文学の問題点」（『改造』1952 年 8 月号）のなかで、「民族独立」を手段とするような「国民文学」の主張は、「自我の確立の文学」を含まずに「封建制との戦いを回避している」のであり、「そのようなものは、そもそも文学と称しえない」と述べた。また竹内は、「文学における独立とは何か」を明らかにするために、「反対概念」としての「文学における植民地性」に注目する。日本文学の現状を「植民地的である」ととらえる竹内は、戦争のたびに「植民地化への抵抗を放棄した」ことによって「日本文学」は飛躍的に発展し、戦争中には「ドレイ性」を十全に発揮したと指摘した。そして、失った創造性を回復するために「文学の国民的解放」を求めていく [4)]。

その後、野間宏は「国民文学について」（『人民文学』1952 年 9 月号）のなかで、竹内の使う「文学の自律性」の内容に疑問を呈するとともに、「封建制との戦いを回避している」という竹内の指摘に反論する [5)]。それに対して竹内は、「文学の自律性など－国民文学論の本質論の中」（『群像』1952 年 11 月号）において、「文学の自律性」と「封建制からの解放」という観点から問い返した。野間の文章に「押しつけ」を感じ取った竹内は、政治と文学を「機能的に区別」することを主張したうえで、「小説を書くことも、一方で

は政治的行為であり、綱領の文章表現は文学的行為である」と述べた。それから野間が「民族の独立」を優先させた結果、「政治のプログラムをそのまま文学に適用したという印象」を与え、それはまた野間の文体にもあらわれていることを指摘した[6]。

竹内は、「民族的な危機」を煽る言説が流通するなかで、「民族解放の文学」として国民に広く読まれる「国民文学」を目指すことを唱えていたが、竹内の用いた「民族」という語や挑発的な文体が誤解を招き、「運動」としての「国民文学」は、広がりを持ち得なかった。しかし、見方を変えると、竹内は、「国民文学」の可能性を限定するような定義化に抵抗していたとはいえないだろうか。先述した野間への反論も「民族独立」を手段とするような「国民文学」が実体化するときにあらわになる問題点を指摘したものだといえるだろう。

「国民文学論」に関しては、佐藤泉が「教科書的文学史の出自－国民文学論」(『戦後批評のメタヒストリー』) で詳細に論じている。佐藤は、「国民文学論」が提起された政治・文化状況の文脈を確認しつつ、「国民文学論」による文学史の書きかえが、のちの教科書的な文学史の基軸として機能したことを論じた。また日本文学協会 1954 年度大会「国民文学の課題」において在日朝鮮人の金達寿の小説『玄界灘』(初出『新日本文学』1952 年 1 月号～1953 年 11 月号、1954 年刊行) を「国民文学」に回収しようとした言説に注目し、1952 年のサンフランシスコ講和条約発効によって日本国籍を剥奪された旧植民地出身者の小説から「国民」概念を再構成する動きを読みとった[7]。

たとえば、平林一が発表した「国民文学の問題－『玄界灘』をめぐって」のあとの討論のなかで、猪野謙二は、「現在われわれ日本の国民がおかれている現実というものは、この『玄界灘』に書かれているところの被圧迫民族としての朝鮮の人々がなめてきた悲惨な現実とまったく同様のもの」であると発言していた[8]。だが、その発言には、歴史的な文脈を捨象して「被圧迫民族」に同一化しようとする徴候があらわれている。あるいは、「被圧迫民族」という同一化を通じて「われわれ日本の国民」という主体に回収しようとしているといえるだろう。またそれは中心による周縁の包摂といえるかもしれないが、「中心」と「周縁」の関係は、決して一方向的なものばかりではない。本稿では、両者の関係性を固定したものとみなさず、「周縁」とみなされる側からとらえなおしていきたい。「国民文学」という「日本文学」の編成によって生じた綻びに注目することから、「日本文学」に回収しえない文学の可能性を見出すことができると考えている。

２．沖縄における国民文学論

ここで沖縄における「国民文学論」について注目したい。沖縄において「国民文学論」がどのように受容されたのかを検討するうえで、琉球大学の学生によって発刊された文芸雑誌『琉大文学』は、重要である。

『琉大文学』は、1953 年 7 月 23 日、琉球大学国文学科の学生が中心となって結成さ

れた「琉大文藝クラブ」の新井晄（新川明）と原龍次（松原清吉）を編集者として創刊された。創刊当初は、詩や小説を主に発表していたが、第六号（1954 年 7 月）掲載の、新井晄「船越義彰試論－その私小説的態度と性格について」と川瀬信（川満信一）「『塵境』論」によって批評が登場し、続く第七号（1954 年 11 月）掲載の新川明「戦後沖縄文学批判ノート－新世代の希むもの－」と川瀬信「沖縄文学の課題」によって、前世代の文学を批判し、新しい沖縄の文学の創造を訴えていくのである。こうした批評の展開とともに、創作でも池澤聡（岡本恵徳）の「空疎な回想」（第七号）が、「ガード」と改題されて『新日本文学』1955 年 9 月号に、喜舎場順（喜舎場朝順）の「暗い花」（第十号、1955 年 12 月）が、『新日本文学』1956 年 7 月号にそれぞれ転載された。

また米軍基地建設を目的に、1953 年に公布・施行された布令 109 号「土地収用令」を根拠にして沖縄各地で土地接収が行われていくなかで、嶺井正（嶺井政和）は、土地接収後の伊江島を取材して「伊江島」（第九号、1955 年 7 月）というルポルタージュを書き、さらに同人たちの多くは 1955 年 7 月の宜野湾村伊佐浜の土地接収の現場で抵抗運動にかかわっていた。だが軍事基地化していく政治社会状況は、こうした表現の試みに弾圧を加えていくようになる。

たとえば第八号（1955 年 2 月）は、発刊後に大学当局によって回収され、第十一号（1956 年 3 月）は「学生準則」に定められた「事前検閲」に従わなかったために半年間の活動停止と停刊処分を受けた。そして、米軍基地建設のための土地接収の正当性を認めた「プライス勧告」に対して沖縄全土にわたって抗議運動を展開した 1956 年の島ぐるみ土地闘争に反米的な態度で関わったとして、琉球大学の学生 6 名が退学処分を受けた。このいわゆる「第二次琉大事件」において、同人の具志和子が停学、豊川善一、嶺井政和、喜舎場朝順が退学処分を受けたのである [9]。

この『琉大文学』において「国民文学」は、「旧い世代」が「新しい現実を切り拓らいていくという自覚された立場」にないことを嘆く新川明の文章のなかに登場する。

> いずれにせよ、僕たち若い世代は三十代の一部をも含めて、四、五十代の人達に新しい文学を期待などしていないことだけはたしかなことである。このことは僕たちにとって、本土と本土の旧い世代をも含めて自覚的な文学者たちの間で、ようやく具体化され、深化されつつある国民文学運動などをおもう時沖縄が南海の孤島だというだけでなく本土と切り離されて占領下の社会にあるという点でも、二重三重の悲しみであるのである [10]。

これは『琉大文学』第七号に発表された新川の「戦後沖縄文学批判ノート」のなかに見られる記述である。新川が期待する「新しい文学」と「国民文学論」はどういう点で結びついているのか。ひとつは、戦争の傷跡をいかに描くのかという点である。新川は、

佐々木基一の「恐らく戦争はこの大家たちの心に何程の爪痕も残さず一種の災害として感じられたにすぎないのではないだろうか」（「戦後文学の諸相」（『岩波講座　文学　第五巻』1954 年）という発言を沖縄の文学をめぐる状況に重ねながら、太田良博「黒ダイヤ」（『月刊タイムス』1949 年 3 月号）、大城立裕「老翁記」（『月刊タイムス』1949 年 11 月号）、冬山晃「帰郷」（『うるま春秋』1950 年 8 月号）など先行する世代の小説作品を批判していくのである。さらに、ノスタルジックな語りに侵入する「平和」という「美しい言葉」がはらむ危険性を指摘したあと、「周囲の現実の分析は当然吾々の過去の分析と究明に遡るし、そこから正しい強靭な民族的文学を期待する事も出来よう」と述べていた。そして、『日本の現代文学史』（1954 年）の「国民文学論」に関する記述を以下のように引用する。

> 国民文学創造への努力は今日真剣に行われている。そして更にこの課題は今後、さまざまの文学者の文学的いとなみをひとつの目標に統一、結集させ、日本文学の遺産、外国文学の成果と対決、継承、摂取しながら、国民の生活のたたかいとむすびつき、そのなかから創造のエネルギーをくみとり、文学の国民への解放と、国民解放のための文学創造を統一的に実現していこうとする巨きな国民的文学運動として展開していかねばならぬのである。[11)]

そしてこの言葉に続けて「吾々もこのような国民文学への道をはっきり自覚して吾々の文学を押しすすめてゆかねばならぬのだ」と書き継ぎ、次のように主張する。

> 国民文学の一要素である沖縄の郷土文学も真にそれを全住民のものとなし、国民文学の一翼たらしめるためには今後強力にこのような文学運動を展開しなければおよそ空しいものとなるだけであろう。[12)]

「国民文学の一要素である沖縄の郷土文学」や「国民文学の一翼たらしめる」という言葉からは、「国民文学」の構成要素として沖縄の文学が位置づけられているようにみえる。また小松寛が指摘するようにそれ以降に新川は「国民文学」という文言を用いなくなるが、そのことを「新川が国民文学論に刺激されて沖縄民族意識を高めた結果である、と想像することは難くない」、あるいは「沖縄民族の独自性を認識した新川は、国民文学論が目指す日本民族との距離感を感じ取」り、「日本民族の創造を志向する国民文学論を、沖縄民族の志向性に自己解釈した」というふうにまとめるのには疑問がある[13)]。

たとえば、同人の小説作品をめぐって論争がくり広げられたように『琉大文学』が相互批評的な場であったことを考えると、新川が直接「国民文学」に言及しなくても、他の同人の発言やその発言への新川の対し方にも注目する必要があるのではないだろうか。

またその後の新川の批評や詩表現の展開を見ると、「沖縄民族の独自性」や「沖縄民族の志向性」にくくりとることのできない思考の広がりを見ることができるからである。こうした点について、『琉大文学』第九号（1955 年 7 月）に焦点を当てながら検討していきたい。

３.『琉大文学』における国民文学論の流用

「500 部出版されたうち手もとにあった 60 部と書店に委託した幾冊かが当局から回収された」[14]という『琉大文学』第八号（1955 年 2 月）の後に発刊された『琉大文学』第九号（1955 年 7 月）は、それまでにない政治的な企みに満ちた号となった。

1955 年 3 月に米軍による強制収用によって土地を奪われた伊江島の人々に対して、嶺井正（嶺井政和）は「伊江島」というルポルタージュを、また松島彌須子（松島康子）は「伊江島－島の序説－」という詩を発表した。他にも短歌などで、伊江島を題材に扱っている作品があった[15]。こうした一連の動きは、前号が大学当局に回収されたことを考えると、きわめて異例であるといえるだろう。しかし、逆にいうと、生活する土地を奪われ、その場所に軍事基地が造られるといった事態に対する怒りが、同人たちを表現に向かわせたともいえるはずである。

第九号で特に注目したいのは、「沖縄に於ける民族文化の伝統と継承」という座談会である。この座談会には、小説を中心に文学活動を展開していた大城立裕や太田良博、また当時文学評論を書いていた玉栄清良、さらに『琉大文学』同人の新川明、川満信一、池澤聡（岡本恵徳）らにくわえて、琉球方言の研究者の仲宗根政善と作家の嘉陽安男が誌上参加している。座談会のタイトルからも、当時の『琉大文学』同人たちは、「国民文学論」の強い影響下にあったことがうかがえる。

ここで注意しておきたいのが、「国民文学論」の「国民」という言葉が示唆するように、「国民文学論」は、ナショナルなものへの回帰を潜ませていたという点である。「国民文学論」は、「国民」や「民族」について語る際に、前提として「日本」というナショナリティを想定し、思考していた側面があるからだ。ならば、次のような問いを投げかけてみよう。沖縄において「民族」とは何であろうか。こうした問いは、座談会では直接的には語られていなかったが、当の座談会に出席していなかった二人の発言のなかに、当時の沖縄における「民族」という言葉に対する認識の特性が示されているといえる。たとえば、仲宗根政善は、次のように述べていた。

> 琉球民族と云うような呼び方をする時に、我々はしばしば言葉にあやまられる。琉球は日本の一地方である。その文化も日本文化の一支流たるに過ぎない。権威者が琉球文化を東洋に於ける独自の文化として絶賛したにせよ、明らかに日本の地方文化であり、たゞローカル色が濃厚であると云うに過ぎない。日本々土に匹敵するよ

うな、而もそれとはちがった伝統を無理に求めようとしても徒労であろう。薩摩にもそんなものはなかろう。根幹と支葉の関係を離れて沖縄の伝統の問題を考えようすると迷路にはまりそうだ。[16]

ここで注目したいのが「琉球は日本の一地方」と位置づけている仲宗根の視点である。仲宗根は方言研究者として、琉球方言に日本語の古い音韻が残っているという認識に基づく考えを述べているのだろうが、座談会でじっさいに議論されたのは、「民族文化の伝統」をどのように「継承」し「創造」するかという点であり、「民族」とは何かということについては議論されなかった。この「琉球は日本の一地方」というまなざしは、仲宗根に特有のものではない。

当間嗣光は「さまざまな闘いの中でーサークル誌めぐり」(『新日本文学』1955 年 10 月号）のなかで、「ややもすれば、日本人としての精神まで蝕まれつつある危険さえある沖縄で、民族文化の伝統と継承について、『琉大文学』が座談会を開いた意義は深い」と評価した。また当間は、「万葉の精神」が盛衰を経て明治時代の正岡子規に継承されて現在にいたる、という仲宗根の言葉を引用したあとで、「民族文化の伝統と継承」を仲宗根以外の「他の出席者の大半が、日本文化の一環として論じようとする意識的構えが欠けていたところから、その意味あいで仲宗根の言葉を今後進展させて欲しい」と述べた[17]。

また仲宗根と同じく誌上参加した嘉陽安男は、「民族文化」について語る際に「古文化財保護運動」に言及している。嘉陽が言及した「古文化財保護運動」というのは、作家山里永吉を中心とする文化財保護委員によって、沖縄戦で焼失した首里城などの文化財の再建を通じて「郷土文化」「琉球文化」を復興しようとした運動であった。さらに、早い時期からアメリカの占領政策として「琉球文化」が求められていたことからも、座談会が行われた時期に「民族文化」といえば、文化財保護運動との関連で考えられることが多かったといえる。じっさい、座談会に出席した大城立裕も「園比屋武御嶽」など具体的な文化財に即して「民族文化」を論じていた。

こうした当時の認識に対し、川満信一は「伝統について再確認し、継承しなければならない」理由を次のように述べた。

私達の下積みにされ、二重三重の圧迫を受け続けた民族の精神が、今新しく加えられてくる弾圧を撥ねかえし、解放された世界を創造しようとする積極的な意欲の根源として、正しい民族精神の伝統を必要としているからだと云えると思います。[18]

また司会の池澤聡から「民族的な文化遺産を継承することについての民衆性」を問われた川満は、沖縄の被支配の歴史をたどりながら、現在は「民主々義でカムフラージュされた植民地的な支配」の段階にあると言い、さらに「文学の場合特にそうですけれど

も」と断りつつ、「現在の植民地的支配からの民族的解放と云うような民族的な力の集中とその運動と云う中で、変革される意識、その変革過程と共に、伝統がふりかえられなければならない」と述べていた[19]。ここにおいて、川満は「民族文化」に関する議論のなかで、「民族文化の伝統と継承」というテーマを行為遂行的に読みかえて「流用」（appropriate）しながら、政治的主張を行なっているといえるだろう。

他にも新川明は、永積安明の言葉を引きながら、「正しく民族的であるのは正しく政治的であり、正しく政治的であるとは、全人民と共に政治に対して正面から取り組んでいく」ことだと主張し、「人民大衆との結びつきも結局、われわれの民族的な独立の中でしか出来上らないもの」であると述べていた[20]。つまり、新川と川満は、同時期の可視化され、求められる「琉球文化」とは異なるかたちで、「民族文化」の概念を読みかえながら、反植民地主義や解放にまつわる言説と結びつけて「流用」していたといえるだろう。

一見すると座談会の議論はかみ合わないものだが、当時のアメリカ占領下の沖縄における文化政策の視点から見ると、沖縄において「民族文化の伝統と継承」を議論すること自体はむしろ望まれていたといえる。なぜなら、「日本復帰運動」を「共産主義」的政治運動として弾圧する動きを見せる米軍の占領政策は、「日本」と「琉球」とを引き離そうと試みていたからである。占領者側にとって「民族」とは、「琉球民族」を指し、「日本」とは異なる独立した「民族」と措定されなければならなかった[21]。

しかし占領者が期待する「琉球／沖縄」像を解体しつつ、『琉大文学』同人たちは、「民族文化」の可能性を広げていくのである。たとえば、池沢聡（岡本恵徳）は、第九号（1955年7月）の「編集部便り」のなかで座談会の内容にふれながら、「現在、沖縄だけでなく、東南アジヤ（ママ）を含めて、植民地支配のもとにある世界の諸地域に、民族意識の高まり」があり、それは「民族的な伝統文化の確認」に結びつくとともに「民族文化の創造」につながると指摘した。このことは「現在の様な植民地支配下にある沖縄に生きる者にとって必然の生き方」であり、「伝統がその民族の生き方の基定をなすものであり、創造主体に働らく創造の契機であるのならば、我々は此の問題からそれた位置で新しい創造を生み出すことは出来ない」として「植民地支配政策の一環としての、コスモポリティックな文化攻勢が激しくなる」なかでそれに対処するためにも「民族文化の伝統」を問題にしていかなければならないと述べていた[22]。

ここで池沢が感受している、東南アジアや植民地支配下にある諸地域の「民族意識の高まり」というのは、1955年4月にインドネシアのバンドンで開かれたアジア・アフリカ（AA、バンドン）会議のことである。この会議は、インドネシアのスカルノ大統領、インドのネルー首相、中華人民共和国の周恩来首相、エジプトのナセル大統領らが中心となった、第三世界による初めての国際会議で、アジア・アフリカの29カ国が参加した。この会議によって、アジアとアフリカ諸国の連帯を世界に示し、平和共存と反植民地主義という「バンドン精神」がアピールされたのである。

ちなみに当時の沖縄の新聞の社説でもアジア・アフリカ会議のことが取り上げられていたが、「バンドン会議における植民地主義攻撃をわれわれが口にして、反米の立場に立つことは許されない」[23]という論調であった。その点、池沢のアジア・アフリカ会議への強い共感は、米軍占領への抵抗を明瞭に打ち出しつつ、アジア・アフリカの民衆への「連帯」を呼びかけていたのだといえよう。

先述したように、この座談会が掲載された第九号には、伊江島の土地接収に関連した作品が多く登場しているのだが、第九号が発行された同じ月に、宜野湾村の伊佐浜でも土地接収が行われ、『琉大文学』同人たちは、占領米軍によって強制的に土地が接収されていく現場で抵抗を試みていたのであった[24]。しかし、米軍のブルトーザーによって、伊佐浜の土地は接収された。そのことに対する怒りが、同人たちを中心に結成された「新沖縄文学グループ」の機関誌『前衛地帯』の発刊に向かわせる。「ブルトーザの沖縄人の運転手」の置かれた位置への言及[25]や直截に米軍を批判する言葉は、沖縄の政治社会状況を告発するビラを思わせる。当時琉球大学の「学生準則」で、集会、出版、「学内における掲示」には、事前に許可（事前検閲）が必要であったことを考えると、きわめて困難な米軍への抵抗を、「撹乱し、呼びかけ、脅威を与え、そして最後に問いを発するが、答えは期待せず、確かさの上に安住しない」というモーリス・ブランショが位置づけた「際限ない街路の言葉たち」＝「ビラ、ステッカー、パンフレット」の手ざわりで試みた表現方法といえるだろう[26]。

こうしたなかで千田衛（新川明）は、『前衛地帯』の「編集後記」で、「植民地的政策に乗って、すべての面で植民地文化に侵蝕されつつある現在、民族文化継承の方法と態度」を課題にしていく重要性を述べていた[27]。そして新川の「民族文化」へ寄せる思いは、『琉大文学』第十号（1955 年 12 月）にも引き継がれていくのであった。

北谷太郎（新川明）はこの号に掲載された「批評・その位置と態度　われわれの内部の問題（三）」のなかで、シケイロスやリベラやオロスコなどに代表される「メキシコ現代美術が受けついだ、そのようなパッショナルな迫力と、すさまじいまでに民族的なエネルギーの表現については、僕たちが僕たちの真の民族文化を継承するに際して最も教訓にすべき点」であり、「民族のプリミティーフな、その人間的なエネルギーの根元に溯り、それを掘り起こし、現代の強烈な息吹きを与える仕事は、社会的にも人間的にも革命的な『たゝかい』を通してのみ可能」であると述べていた[28]。この新川の主張の根底にあるのは、同時代の反植民地運動の盛り上がりへの強い共感だといえるだろう。

新川明の現代メキシコ美術やメキシコ革命に寄せる思い、池沢聡（岡本恵徳）のアジア・アフリカの民族独立運動への強い共感は、「国民文学論」が一方で内包している国民統合への回収作用や、沖縄における文化財保護運動や米軍の占領政策の求める「琉球民族」といった安定的な枠組みを超えて、「民族文化」を通して第三世界とつながりうる、新たな「連帯」の可能性を開いていったのである。

さらに新川は、『琉大文学』第十一号（1956 年 3 月）に「『有色人種』抄（その 1)」という詩を発表した。この詩では、「白人」から「黄色人種」と呼びかけられた「ボク」が、占領者が「有色人種」に投げかけるまなざしを「流用」しながら、沖縄に駐留する黒人兵の身体に刻印された「苦渋の歴史」を訴えることで「有色人種」どうしの「連帯」を呼びかけていた。新川が「国民文学論」から見出した「民族」という論点から「有色人種」という人種主義的カテゴリーを「流用」していく展開については稿を改めて論じたい[29]。

４．編成と綻び

『琉大文学』における「国民文学論」には、新たな「日本文学」の編成に与するものではなく、むしろ、編成によって何が見えなくなるのかを問い返す文学的抵抗の可能性が潜勢している。「国民」という主体を欲望しながら「国民文学」としての「日本文学」が文学史の記述に編みこまれていく一方で、編みこむことのできない「綻び」があらわれてくる。その「綻び」から紡ぎ出される抵抗の言葉に、戦後日本語文学における歴史認識を切り開く地平を見出すことができるのではないだろうか。

新川明の「戦後沖縄文学批判ノート」(『琉大文学』第七号、1954 年 11 月）は、戦前から活躍する作家たちが沖縄の「文壇」を形成することによって「文学史」が構築されていくことに対する異議申し立てであった。また同じく『琉大文学』第七号に発表された川瀬信の「沖縄文学の課題」では、「文学以前の問題」として、アメリカ占領下の沖縄で発表する場が新聞に限られていることや検閲の問題をとりあげ、作者と読者の関係に言及したあとに、今後の課題を論じていた。その際に川瀬は、竹内好の「文学の自律性」をとりあげながら、文学を政治と切り離すのではなく、「むしろ反対に政治と密接な結びつきをもつ文学こそ『自律性』を確保することのできる文学ではあるまいか」と述べ、「文学における政治的実践の必要性」を説いた[30]。こうした新川と川瀬の問いかけは、「沖縄文学」を創造していく実践といえるだろう。

さらに川瀬は、「この頃おもうこと」(『琉大文学』第八号、1955 年 2 月）のなかで、次のようなつぶやきを書き記していた。

> 生活することそれ自体がすでに戦争への直接、間接の協力にほかならない社会現情下で、如何にして私達は人間性のモラルを支えたら良いだろう。此の島の住民と同じく、長い圧迫の歴史をもっていた民族が、ようやく歴史の重荷をくつがえして新しい自分達の歴史をきり抜いて行こうとしているのだが、こうした民族の平和への欲求を裏切って、ふたたび彼等に屈辱と悲惨の歴史をくりかえさせるための計画に参加しなければならない自分達の立場の苦しさをどう解決すべきだろうか。[31]

ここで川瀬は、アメリカ占領下の沖縄で生活していくことが戦争への協力につながることを凝視しつつ、基地あるがゆえに他者をも暴力に巻き込んでしまうといった加害性を発見している。そして、川瀬は加害性を自覚すると同時に沖縄の住民と同じように暴力にさらされている「長い圧迫の歴史をもっていた民族」の存在を見出したのである。新城郁夫は、「朝鮮戦争という戦争の拡大を目の当たりにして、その戦争にシステマティックに加担させられてしまっている沖縄の現実」に向き合う川瀬の「この頃おもうこと」は、「その戦争の当事者性の発見において、同時に、同じ植民地状況にあえぎそして戦争の下に殺戮されていく朝鮮半島の人々との共生（共死と言うべきか）感を手繰り寄せていこうとする」試みだと指摘している[32]。ここで新城が指摘する「朝鮮半島の人々」との共生共死感は川瀬だけでなく、同じ第八号に掲載された喜舎場順（喜舎場朝順）の詩「惨めな地図」のなかにも次のようなかたちで表出していた。

ぽちやぽちやな三里以内の海の向うに冷酷な
二十七度線の壁はおまえたちの鳩の首を折り
おまえたちの　すばらしい夢を遮断している
そして
おまえたちの　額と思考と足の上を
べたべたとしき続ける滑走路
いたるところ星印に塗り込められた
ゴルフ場のある地帯。
それは　昨日　朝鮮の若者たちと麦畑を焼き払った
怪獣の屯所。そして
そこにも　あの漁夫を殺した同じ悪臭をはなつ
缶詰が貯蔵されている。に違いない。[33]

この詩にある「いたるところ星印に塗り込められた／ゴルフ場のある地帯。／それは昨日　朝鮮の若者たちと麦畑を焼き払った／怪獣の屯所」という直截な表現には、朝鮮戦争後の朝鮮半島の分断状況に対して、沖縄は米軍基地あるがゆえに朝鮮に生きる人々への暴力を行使する側にいることが看取できるのである。このような「加害性」の発見を通じて、暴力にさらされる他者を見出していく表現は、他者へと開いていく言葉の実践といえるだろう。

本稿では論じることができなかったが、『琉大文学』と同じ 1953 年に創刊された「大阪朝鮮詩人集団」の雑誌『ヂンダレ』（1953～58 年。20 号）に集う文学者たちは、「朝鮮語」で「祖国」を描いていく「民族文学」が求められるなかで、金時鐘を中心に「日本語」を選び取ることによって「在日朝鮮人」という主体形成を試みていた[34]。

こうした「国民」に統合されえない表現主体の試みから、戦後日本語文学における「国民」をめぐる文学の抗争／構想を紡ぎなおすことができるのではないだろうか。

註

1) 竹内好「近代主義と民族の問題」(『文学』1951 年 9 月号)、39～43 頁。
2) 本多秋五「『国民文学』をめぐる論議」(『物語戦後文学史（中)』岩波書店、1992 年）参照。
3) 菊地章一「国民文学論の教訓－文学統一戦線今日の問題－」(『新日本文学』1954 年 2 月号）参照。
4) 竹内好「国民文学の問題点」(『改造』1952 年 8 月号)、218 頁。
5) 野間宏「国民文学について」(『人民文学』1952 年 9 月号）参照。野間は、「私たちのめざすこの国民文学とは、現在の植民地下の日本民族の苦しみや、喜び、それをはっきりと表現しそれを徹底的に解放する文学である」（35 頁）と述べている。
6) 竹内好「文学の自律性など－国民文学論の本質論の中」(『群像』1952 年 11 月号)、32～33 頁。
7) 佐藤泉「教科書的文学史の出自－国民文学論」(『戦後批評のメタヒストリー　近代を記憶する場』岩波書店、2005 年）の特に第四節を参照。
8) 「討論」（日本文学協会編『国民文学の課題』岩波書店、1955 年)、178 頁。
9) 『琉大文学』は、管見の限りでは、34 号（1978 年）まで確認することができる。『琉大文学』に関しては、鹿野政直「『否（ノン）』の文学－『琉大文学』の航跡」(『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社、1987 年、『鹿野政直思想史論集　第三巻　占領下を生きる』岩波書店、2007 年所収)、新城郁夫「戦後沖縄文学覚え書き－『琉大文学』という試み」(『沖縄文学という企て－葛藤する言語・身体・記憶』インパクト出版会、2003 年）がくわしい。岡本恵徳「『琉大文学』のころ」(『「沖縄」に生きる思想　岡本恵徳批評集』未來社、2008 年)、新川明『沖縄・統合と反逆』（筑摩書房、2000 年)、新川明・豊川善一・中里友豪・岡本恵徳・新城郁夫・屋嘉比収「座談会『琉大文学』50 年」(『けーし風』第 40 号、新沖縄フォーラム刊行会議、2003 年）といった同人の証言や、批判的にかかわった大城立裕の『光源を求めて』（沖縄タイムス社、1997 年刊、『大城立裕全集　第 13 巻』勉誠出版、2002 年所収）での『琉大文学』批判がある。この大城の『琉大文学』批判に対しては、国場幸太郎が「大城立裕『文学のたたかい』への異論」(『沖縄タイムス』1997 年 9 月 23 日）で反論している。拙稿「継続する戦争への抵抗－池沢聰『ガード』論」(『日本近代文学』第 78 集、日本近代文学会、2008 年）参照。
10) 新川明「戦後沖縄文学批判ノート」(『琉大文学』第七号、琉球大学文芸部、1954 年 11 月)、29 頁。
11) 註 10）前掲新川、39 頁。日本現代文学史研究会編『日本の現代文学史』(三一書房、1954 年)、299～300 頁。
12) 註 10）前掲新川、39 頁。
13) 小松寛「沖縄における『反復帰』論の淵源－『琉大文学』を中心に」(『早稲田大学大学院　社会科学研究科　ソシオサイエンス』14 号、2008 年 3 月)。『琉大文学』が国民文学論から影響を受けていたことについては、岡本恵徳「戦後沖縄の文学」(『沖縄文学の地平』三一書房、1981 年)、註 9）前掲鹿野、新城論文でも指摘されている。
14) 川瀬信「一歩前進しよう」(『琉大文学』第九号、琉球大学文芸部、1955 年 7 月)、41 頁。
15) 『琉大文学』第九号（1955 年 7 月）には、次のような短歌表現の試みがなされていた。
「人間としての同情の声も発せられず伊江島陳情団を黙然と見守る」（宮城美智子）
「ブルトーザで敷き壊されし伊江島の悲惨なる写真をしばし見守る」（城間善徳）
「ラジオ聞きし祖父母はも言ふ伊江島の死に迫る現状を救ふ道は如何に」（具志和子）
16) 仲宗根政善・嘉陽安男・大城立裕・新川明・玉栄清良・太田良博・川満信一・池澤聡「沖縄に

於ける民族文化の伝統と継承」(『琉大文学』第九号、琉球大学文芸部、1955 年 7 月)、14 頁。
17) 当間嗣光「さまざまな闘いの中で－サークル誌めぐり」(『新日本文学』1955 年 10 月号)、98～99 頁。
18) 註 16) 前掲、10 頁。
19) 註 16) 前掲、11～12 頁。
20) 註 16) 前掲、13 頁。
21) 米軍の占領文化政策については、新崎盛暉『戦後沖縄史』(日本評論社、1976 年)、宮城悦二郎『占領者の眼』(那覇出版社、1982 年)、鹿野政直「『沖縄』と『琉球』のはざまで－戦後の出発」(『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社、1987 年、『鹿野政直思想史論集　第三巻　占領下を生きる』岩波書店、2008 年) を参照した。
22) (池沢)「編集部便り」(『琉大文学』第九号、1955 年 7 月)、33 頁。
23) 「社説／新しい型の統治を、沖縄に」(『沖縄タイムス』1955 年 5 月 1 日)。
24) 喜舎場順「伊佐浜のおばさん」(『青い海』第 10 巻第 3 号通巻 91 号、青い海出版社、1980 年 3 月)、川満信一「飢餓の原基－伊佐浜土地闘争と移民－」(『沖縄・自立と共生の思想』海風社、1987 年)、嶺井政和『琉大が燃えた日』2000 年 (http://w1.nirai.ne.jp/nyanko/father.html) 参照。
25) 田部美子の詩「このような抵抗のなかで」(『前衛地帯』創刊号、新沖縄文学グループ、1955 年 12 月) には、次のような言葉が書き込まれていた。「ブルトーザの沖縄人の運転手に／人々の怒りとののしりと憎しみの／言葉が浴せられた／『そうだ、そうだ沖縄人が／同じ沖縄人の田畑をひき埋めるはずがない』／みんなの喜びの吐息がもれた瞬間／鞭がピシャッ、とその背にうちこまれた。／『あいつは失業者になる』／後の方で小さい声がした。／誰も何も言わなかった。／黙って見ていた。黙ってー。」。
26) モーリス・ブランショ「ビラ、ステッカー、パンフレット」(『ブランショ政治論集 1958－1993』安原伸一朗・西山雄二・郷原佳以訳、月曜社、2005 年)。また『前衛地帯』と同時期に刊行された『琉大文学』第十号 (1955 年 12 月) には、次のような短歌が掲載されていた。
「沖縄地図開げて記す接収地の朱印大きく憤り増す」(宮城美智子)
「静かなるべき田舎の山は崩されて弾薬倉庫は続々並ぶ」(具志和子)
27) 千田衛「編集後記」(『前衛地帯』創刊号、新沖縄文学グループ、1955 年 12 月)。千田衛が新川明のペンネームであることは、新川明氏本人の証言による。納富香織「新川明著作目録」(『新川明文庫目録』西原町立図書館、2006 年) 参照。
28) 北谷太郎「批評・その位置と態度　われわれの内部の問題 (三)」(『琉大文学』第十号、琉球大学文芸部、1955 年 12 月)、52～53 頁。
29) 新川明「『有色人種』抄　(その 1)」(『琉大文学』第十一号、琉球大学文芸部、1956 年 3 月)。この詩に関しては、註 9) の鹿野、新城論文以外に、マイク・モラスキー『占領の記憶／記憶の占領』(鈴木直子訳、青土社、2006 年) の第三章「差異の暗部」の「抵抗の詩－新川明『有色人種』」で論じられ、拙稿「他者とのつながりを紡ぎなおす言葉－新川明と金時鐘をめぐって」(『音の力　沖縄アジア臨界編』インパクト出版会、2006 年) でも考察を行なった。
30) 川瀬信「沖縄文学の課題」(『琉大文学』第七号、琉球大学文芸部、1954 年 11 月)、52～53 頁。
31) 川瀬伸「この頃おもうこと」(『琉大文学』第八号、琉球大学文芸部、1955 年 2 月)、34 頁。
32) 註 9) 新城論文、28 頁。
33) 喜舎場順「惨めな地図」(『琉大文学』第八号、琉球大学文芸部、1955 年 2 月)、17～18 頁。
34) 『ヂンダレ』については、梁石日『修羅を生きる』(講談社現代新書、1995 年)、梁石日『アジア的身体』(平凡社ライブラリー、1999 年)、金石範・金時鐘著　文京洙編『なぜ書きつづけてきたか　なぜ沈黙してきたか　済州島四・三事件の記憶と文学』(平凡社、2001 年)、金時鐘『わが生と詩』(岩波書店、2004 年)、金時鐘「人々のなかで」(『現代思想　臨時増刊　戦

後民衆精神史』2007 年 12 月）を参照。なお、2008 年 11 月に不二出版より『復刻版　ヂンダレ・カリオン』（『ヂンダレ』1〜20 号、『カリオン』1〜3 号、『原点』1 号、『黄海』創刊号）が刊行された。

※　本稿は、日本学術振興会研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。